

## 神聖ローマ帝国の始まりについて(その三)

兒 玉 彦 一 郎

柔道整復学科

## On the Beginning of the Holy Roman Empire

Hikoichiro KODAMA

### 要 旨

本稿は、アーヘン以外で「ローマ王」となった王とその経緯を述べたものである。

キーワード：アーヘン、1356年の金印勅書

### Abstract

In this paper the German kings or emperors who were not coronated in Aachen are discussed.

Keywords : Aachen, the Golden Bull of 1356.

## 神聖ローマ帝国の始まりについて(その三)

### On the Beginning of the Holy Roman Empire

#### 0. 初めに

本稿は、アーヘン以外で「ローマ王」となった王とその経緯を述べたものである。

それでは、王となるためにはどのようなことが必要なのであろうか。

「聖職叙任権闘争では、教皇によって国王塗油の秘蹟的性格に意義が唱えられた。グレゴリウス7世は国王をもはや『主に塗油せられた者』でなく、ただなお一人の俗人にすぎないとみなした。教皇インノケンティウス3世のもとで七つの秘蹟の教義が教会法によって定められたとき、支配者の聖別は最終的にその秘蹟的地位を失った。ドイツ王国では国王戴冠の際、塗油はその後も確かにおこなわれたが、フランスやイングランドと違ってもはや秘蹟とはみなされなくなった。…

戴冠の儀式では、狭義の戴冠、新王国に王冠を頭戴する行為がますます前面に現れ、国王推戴の頂点となった。」<sup>1)</sup>

「ドイツ王国における国王推戴の際立った標識は、アーヘンのマリア教会での新国王の玉座登位であった。国王は戴冠の後、戴冠礼服を完全に纏って上階に導かれ、荘重に大理石の玉座に就いた。937年のオットー大帝の選挙以来、玉座登位は国王推戴の重要な法的行為の一つであった。936年から1531年までの間に30人以上の国王がアーヘンの玉座に就いたのである。アーヘンの玉座登位を達成しないのは、恥辱とみられた。」<sup>2)</sup>

「例えばハインリヒ二世とコンラート二世は、マインツで選定され戴冠したが、後にアーヘンで玉座登位を成し遂げたのである。それ故にハインリヒ三世は、1028年にアーヘンで共治国王に選定され戴冠もしたが、ようやく1039年父の死後にカール大帝の玉座に登り、それによって王国を占有したのは、首尾一貫している。アーヘンでの玉座登位は、王国の支配権を付与される行為であった。」<sup>3)</sup>

1039年6月4日、父コンラート二世が亡くなり、ハインリヒ三世は単独の王となった。

以上のようにドイツでは、戴冠とアーヘンでの玉座登位が「(ローマ)王」となるための条件となった。

一般には、アーヘンで王となった者が、ローマで戴冠して「皇帝」となる。

#### ケルン大司教の戴冠権

『正しい場所』アーヘンで、しかも正しい帝冠授与者

であるケルン大司教によって行われる戴冠式の方がもっと重要か、あるいは少なくとも同じくらい重要であったように思われる。」<sup>4)</sup>

「アーヘンは、836年以來疑いなく国王推戴の正当な場所であり、ケルン大司教にであった。それゆえ、ケルン大司教は塗油・戴冠を要求したが、最初はそれを実施できなかった。」<sup>5)</sup>

マインツ大司教「アリボーは王妃ギーゼラに対しては、国王との親族関係が近すぎるとして、その戴冠を拒否したので、ケルン大司教はその好機を利用し、王妃にケルン大聖堂で戴冠した。1028年王位継承者ハインリヒ三世のアーヘンでの戴冠によって、ケルン大司教は戴冠権の要求をついに貫徹できた。ケルン大司教はそれ以来、正当な戴冠者とみなされた。」<sup>6)</sup>

1024年9月21日、王妃ギーゼラはケルンでケルン大司教ピルグリム(Pilgrim)により王妃として塗油と戴冠がなされた。このことによりケルン大司教が戴冠権(Krönungsrecht)を持つこととなった。

そしてハインリヒ三世(王在位1028~56)は、1026年2月アウクスブルクで王に指名され、1028年4月14日アーヘンで共治王として選出され、ケルン大司教ピルグリムにより塗油と戴冠がなされた。

#### 1. アーヘン以外の国王即位

1.1. ハインリヒ二世(Heinrich II. 王在位1002~24; 皇帝戴冠1014年2月14日; 973[78]年5月6日~1024年7月13日)。

ハインリヒ二世については、「1002年6月7日、マインツ大司教ヴィリギスの呼びかけに応じてマインツに集まったバイエルン、フランケン、オーバーロートリンゲンの有力者は、彼らだけでハインリヒを国王に選び出し(ハインリヒ2世)、つづいてヴィリギスの手により王の塗油と戴冠がなされた。」<sup>7)</sup>

なお、1146年、ローマ教皇エウゲニウス3世により、ハインリヒ二世は列聖され、また1200年、皇后クニグンデも列聖された。この皇帝夫妻は今もバンベルクに眠る。

1.2. コンラート二世(Konrad II. 王在位1024~39; 教皇による聖別1027年3月26日(復活祭990年頃~1039年6月4日)。

コンラート二世については、「1024年9月4日、マインツ大司教アリボの呼びかけに応じてライン川中流オッペンハイムの対岸に参集したドイツの聖俗諸侯は、大司教以下ひとりひとりの意志表示の結果、全員一致でザーリアー家のコンラート2世を新しい国王に選出した。…ザクセン朝からザーリアー朝への王統の交替を実現した

このときの諸侯集会は、ドイツ史のうえで、およそ『選挙』の名に値する手続きにより国王を決定した最初の機会となった。…この集会には、若いコンラートを推すケルン大司教ビルグリムと二人のロートリンゲン大公は出席しておらず、ザクセン諸侯の大部分も国王選挙そのものに距離をおいて遠くから見守っていた。…コンラート2世は、先帝紀クニグンデから帝国の諸権標を引き渡され、マインツ大聖堂で塗油と戴冠の儀礼をすませ、さらにアーヘンの聖堂でカール大帝の玉座にのぼった…<sup>8)</sup>

### 1.3. コンラート IV 世(Konrad IV. 王在位 1237~54; 1228年4月25[26]日~54年5月21日)。

1237年2月ウィーンで、フリードリヒ II 世は、指名により息子コンラート(Konrad IV.)をエルサレム王とし、またコンラートは、皇帝の指名によりマインツ大司教、トリアー大司教、ザルツブルク大司教、ライン宮中伯、ベーメン王の諸侯が王として選出した。アーヘンでの戴冠はなかった。

### 1.4. ハインリヒ・ラスペ(Landgraf Heinrich Raspe von Thüringen 王在位 1246~1247; ?~1247年2月16[17]日)。

「勇敢で聡明な男だったので、皇帝フリードリヒは彼をドイツの代官に任命していた。…教皇が、神とキリスト教徒のために王冠を受けるよう、彼に繰り返し指示し、巨額の金を与えたので、ラスペは言い訳を言うのをやめた。1246年の昇天日、マインツ、トリアー、ケルン、ブレーメンの大司教、メッツ、シュパイエル、シュトラースブルクの司教らは、ヴェルツブルクの近郊ファイツホーホハイムでラスペをドイツ王に選出した。有力な世俗諸侯は、高位聖職者らの高慢で一方向的なやり方が気に食わなかったため、一人も出席しなかった。ラスペは坊主王と渾名された。」<sup>9)</sup>

1246年5月22日ヴェルツブルクの近郊ファイツホーホハイム(Veitshöchheim)で、テューリンゲン地方伯(Landgraf von Thüringen)、ハインリヒ・ラスペが王に選出された。聖職者のみで選出されたのでラスペは「坊主王 Pfaffenkönig, rex clericorum」と呼ばれた。またアーヘンでの戴冠はなかった。

1247年2月17日ヴァルトブルク(Wartburg)で戦闘の負傷のため亡くなる。

### 1.5. ハプスブルク家フリードリヒ美王(Friedrich der Schöne 王在位 1314~30; 1289年頃~1330年1月13日)とヴィテルスバッハ家ルートヴィヒ IV 世。

ヴィテルスバッハ家のルートヴィヒ IV 世の母メヒテイルド(Mechthild[Mathilde] 1251~1304)は、ハプスブルク家のルードルフ I 世の娘であったので、ルートヴィヒ IV 世は幼いころ、ウィーンでアルブレヒト I 世の次男フリードリヒ 1 世(美王)と一緒に過ごした。

1314年1月、ハプスブルク家のフリードリヒ I 世は、アラゴンの王女イザベラ(Isabella von Aragon 1296~1330)と結婚する。

ハインリヒ VII 世が亡くなって1年が過ぎ、1314年10月、やっと国王選挙が行われることになった。

10月フランクフルトの国王選挙において、ルクセンブルク家のボヘミア王ヨハンはまだ幼かったので立候補せず、10月19日マイン河の右岸(フランクフルトの)ザクセンハウゼン(Sachsenhausen)では、宮中伯ルードルフ(Rudolf, Pfalzgraf bei Rhein)とケルン大司教、ザクセン=ヴェッテンベルク公ルードルフ(Herzog Rudolf von Sachsen-Wittenberg)、ベーメン王として投票するケルンテン公ハインリヒ(Herzog Heinrich von Kärnten)の3人の選帝侯が推すハプスブルク家のアルブレヒト 1 世の次男フリードリヒ(美王)(Friedrich der Schöne von Österreich)が、20日マイン河の左岸のフランクフルトの市門の前で、マインツ大司教(Erzbischof Peter von Mainz)、トリアー大司教(Erzbischof Balduin von Trier)、ベーメン王ヨハーン(König Johann von Böhmen)、ブランデンブルク辺境伯ヴォルデマール(Markgraf von Woldemar von Brandenburg)、ザクセン=ラウエンブルク公ヨハーン(Herzog Johann von Sachsen-Lauenburg)の4人の選帝侯が推すヴィッテルスバッハ家のルートヴィヒ 4 世の二人が選ばれ、分裂、二重選挙となった。ボヘミアとザクセンの票が割れていた。フリードリヒ I 世は、11月25[15]日ボンの大聖堂で戴冠。国王としてはフリードリヒ III 世美王となる。しかし、一般に「三世」と数えない。

ルートヴィヒ IV 世は、11月25日アーヘンで戴冠。国王としてはルートヴィヒ V 世となる。しかし、(皇帝として)ルートヴィヒ IV 世と呼ばれる。

こうして8年間の戦争が続く。

### 1.6. ルーブプレヒト(Ruprecht von der Pfalz 王在位 1401~10; 1352年5月5日~1410年5月18日)。

選帝侯3人の大司教と宮中伯が皇帝カール IV 世の息子ヴェンツェル王にオーバーラーンシュタイン(Oberlahnstein)に来るように要請する。

しかし期日の1400年8月10日、ヴェンツェル王は現れず、8月20日、マインツ、ケルン、トリアーの大司教と宮中伯4人によりレンス(Rhens)[レンゼ(Rhense)][対岸のオーバーラーンシュタイン(Oberlahnstein)]で廃位させられ、翌21日レンス[レンゼ]で、48歳のループレヒト 3 世(Ruprecht III. von der Pfalz 王在位 1401~10)が4名の選帝侯によりローマ王に選ばれる。ザクセン、ブランデンブルク、ベーメンの3名の選帝侯はこの選挙を認めなかった。ヴェンツェル王はボヘミア王として留まり、ローマ王の称号も手放さなかった。

1401年1月6日、アーヘンが占拠されていたので、ケ

ルンで48歳のループレヒトは、ケルン大司教により即位。

なお、ループレヒト3世は、1374年、ニュルンベルク城伯(Burggraf Friedrich von Nürnberg)フリードリヒ5世(Friedrich V. 1333頃～98)の娘エリーザベト(Elisabeth 1358～1411)と結婚していた。

### 1.7. アルブレヒトII世(Albrecht II. 王在位1438～39; 1397年8月16日～1439年10月27[17]日)。

皇帝ジーギスムントは、自分の後のローマ王として、1421年娘エリーザベトと結婚させ、1423年にはモラヴィアを与えていたハプスブルク家のアルブレヒト5世(Albrecht V)を指名していた。彼は、1437年12月18日ブダでハンガリー王に選ばれ、12月27日、ボヘミア議会によりボヘミア王に選出されプラハで戴冠。翌1438年1月1日、ハンガリー王として戴冠。こうしてボヘミアとハンガリーはハプスブルク家のものとなった。3月18[28]日フランクフルトで、ボヘミア[ベーメン]王のいない6名の選帝侯によりローマ王として選ばれた。アーヘンでの即位はなかった。戴冠はしなかったが、ローマ王とみなされる。4月29日、承認された。ローマ王としてはアルブレヒトII世(Albrecht II. 王在位1438～39)となる。130年ぶりにハプスブルク家から王がでることになった。しかし1439年6月24日、フリードリヒ4世が亡くなる。また10月27[17]日、アルブレヒトII世がオスマン軍との戦っていた戦線で病気でグラン(Gran, Esztergom)近くのネシュメリ(Neszmedly)で亡くなる。ハンガリー王の墓所(Szekesfeherfar)に埋葬された。

ボヘミアはハプスブルク家のものとなった。

### 1.8. フェルディナントI世(Ferdinand I. 王在位1531～64; 1503年3月10日～64年7月25日)。

1531年1月5日ケルンで、皇帝は弟で、ボヘミアとハンガリー王フェルディナントをローマ王として選出させる。当時フランクフルトは宗教改革のため混乱していた。また、この選挙の時、ザクセン選帝侯ヨハン不変公(Johann, der Beständige 在位1525～32)欠席した。1月11日アーヘンでケルン大司教によりローマ王として戴冠。

■これが最後のアーヘンでの戴冠となった。

### 1.9. マクシミリアンII世(Maximilian II. 1527年7月31日～76年10月12日)。

1562年5月14日プラハの聖ヴィート大聖堂でフェルディナントI世の息子、太公マクシミリアンがボヘミア王に選ばれ戴冠。マクシミリアンは、後にプラハで「ユダヤ人保護勅令」を出す。11月24日フランクフルトでマクシミリアンがローマ王に選ばれた。この時ケルン大司教が亡くなっており、アーヘンでの戴冠式は執り行われず、同日の11月24日フランクフルトでマイン

ツ大司教により戴冠式が行われた。

なお1563年7月16日プレスブルクの聖マルティン教会(St.-Martins-Kirche)でマクシミリアンII世がハンガリー王として戴冠。翌1564年7月25日ローマ皇帝(Römischer Kaiser)となる。

以後、一般に国王選挙と戴冠式はフランクフルトで行われ、マインツ大司教により戴冠。また国王選挙は、皇帝選挙と呼ばれるようになる。こうしてローマ王は、(皇帝の死後、)自動的に皇帝となった。

フェルディナントI世は、カールV世が1556年9月12日に退位すると、この日をもって皇帝となった。<sup>10)</sup>

なお、フェルディナントI世以後のハプスブルク家では、ルードルフII世(Rudolf II.)が1575年10月27日レーゲンスブルクで選出され、12月1日そこでマインツ大司教により戴冠。またフェルディナントIII世(Ferdinand III.)が1636年12月22日レーゲンスブルクで選出され、同日そこでマインツ大司教により戴冠。またヨーゼフI世が1690年1月24日アウクスブルクで選出され、1月26日そこでマインツ大司教により戴冠した。

またレーオポルトI世は、1658年7月18日フランクフルトで選出され、7月31日そこでケルン大司教により戴冠した。

## 2. 「神聖ローマ帝国」の名称の成立

「ウィレムは1254年の公式文書に『神聖ローマ帝国』の国号を使用した。コーンフォール伯リチャードもこの国号を使い、『大空位時代』以後、これが定着し、ドイツ王国はその実体のないまま『帝国』と称されていくのである。こうしてウィレムは『神聖ローマ帝国』という称号の栄えある命名者として名を残した。この事績をもって『大空位時代』の始まりをウィレムの没年とする説もあるくらいである。』<sup>11)</sup>

彼の父はホラント伯フロリス4世(独語 Florentius 在位1222～34)。母はメヒティルト(独語 Mechtild von Brabant ～1267)で、メヒティルトの父はブラバント公ハインリヒ[アンリ]1世(独語 Heinrich 在位1183～1235)。彼女の姉マリア(独語 Maria 1191?～1260)は、1214年5月19日にアーヘンで皇帝オットーIV世と結婚し、二番目の妻[皇后]となっていた。

### 2.1. ウィレム・ファン・ホラント(独語 Wilhelm von Holland-Seeland 王在位1248/54～56; 1227～56)

「教皇のために自腹を切って戦う者などいなかったし、ハインリヒ・ラスペの運命が最も貪欲な者たちでさえ震え上がらせていた。このような苦境にあったイノセントにとって、ブラバント公が彼の甥のホラント伯ヴィルヘルムを王に推挙したことは、なんといっても喜ぶべきだったにちがいない。枢機卿カポッチョの切なる要請と、おそらくその他のより下品な説得工作に折れて、三名のラ

インの大司教、数名のその他の高位聖職者、ボヘミア王、ブラバント大公、少数の実力のない帝臣がケルン近郊のヴォリンゲンに集まり、1247年10月4日、ヴィルヘルムを王に選んだ。そうしてヴィルヘルムは盛大に騎士に叙任された。…援軍への期待もまったく消え、皇帝死亡のデマが飛んだ時、ついに1年と20日の包囲の後、アーヘンは1248年10月16日、降伏した。こうしてヴィルヘルムは万礼節にアーヘンにてマインツ大司教によって塗油を施され、トリリア大司教によって王位についたのであった。」<sup>12)</sup>

1248年11月1日アーヘンで、21歳のウィレムはローマ王として戴冠する。

1251年の復活祭で、教皇インノケンティウス四世(在位1243～54)はホラント伯ウィレムのローマ王即位を認めた。

教皇インノケンティウス四世は「シチリアの王冠をアンジュー伯カールに勧めたのである。しかし今回の取引は成立しなかった。というのはインノセントが出した条件があまりに厳しかったので、フランスで一斉に反対が起こったからである。そこでインノセントはつぎにシチリアの王冠をイギリス王ハインリヒ III世の富豪の兄弟、コーンウォール伯リチャルトに勧めた。しかしこれも失敗した。」<sup>13)</sup>

1252年1月、ウィレムはブラウンシュヴァイク公オットー1世(Otto von Braunschweig 在位1235～52)の娘エリーザベト(Elisabeth)と結婚する。

「ウィレムはブラウンシュヴァイク公オットーの娘と結婚し、1252年3月25日、ブラウンシュヴァイクで、同公およびその親戚に当たるザクセン、ブランデンブルクのアスカーニア家一党の出席をえて、改めて国王選挙が行われた。のちほどボヘミア王オタカール(プルシェミスル朝)も追認してきた。」<sup>14)</sup>

1256年1月28日アルクマル(Alkmaar)近郊のライデン(Leyden)の戦いで、ヴィレム[ヴィルヘルム]はフリースランド人との戦いで亡くなる。ヴァルヘレン(Walcheren)のミッデルベルク修道院(Abtei Middelburg auf Walcheren)に埋葬された。

## 2.2. リチャード・オブ・コーンウォール(独語 Richard von Cornwall 在位1257～72; 1209年1月5日～1272年4月2日)。

「イギリス王リチャード・オブ・コーンウォールを推したのはケルン大司教—もっとも熱心な推薦者はリチャードの助力を期待したヤン・ダヴェーヌ—であった。リチャードは当時の支配者のなかではもっとも裕福な者として知られ、湯水のように金をばらまいたといわれる。ケルン大司教とファルツ選帝侯とがリチャードを伴って選挙地のフランクフルトに来てみると、都市はトリリア大司教、ザクセン大公の軍隊によって占拠されて、入ることができず、そこで市門の前で1257年1月13日、選挙が断行

された。ボヘミア王オタカールはのちほど追認した。他方、トリリア大司教アーノルトは、ザクセン、ブランデンブルクの選挙委任者の協力を得て、1257年4月1日、フランクフルトで、カスティリア王アルフォンソを選び、ボヘミア王はこれにも追認の通知を送った。『ザクセンシュピーゲル』でボヘミア王の選挙権が疑問視されているにせよ、オタカールはその行使をゆるがせにしなかったのである。しかし双方とも同数の標をうる結果となり、決着はつかなかった。

先手を取ったのはリチャードで、大勢の従者を連れてドイツに渡り、1257年昇天祭の日に、アーヘンでケルン大司教の手によって戴冠した。」<sup>15)</sup>

「アルフォンソ十世はカスティリャで有力者たちの支持をえられず、ドイツに一度もはいることができなかった。リチャードもまた、ドイツに四度しか渡れず、滞在できた期間も少ない。このように、ドイツに統一国王が存在しない状態が続いたので、これを大空位時代(1254～73年)という。」<sup>16)</sup>

1272年4月2日、リチャード王が亡くなる。

## 3. 選帝侯

ドイツの「国王選挙自体も、13世紀後半からその形式において、教会の選挙のやり方に従って実施されるようになった。」<sup>17)</sup>

つまり「国王は、帝国の有力者たちによって選ばれた。この選挙は、その後、第13世紀中葉以降はじめて、より精密に組織化され、一定の諸侯すなわち選帝侯の特権となった。」<sup>18)</sup>

「シュタウフェン時代になると諸部族は、帝国国制における強力な地位を失った。帝国の構成は、ますます聖界俗界の諸侯領により定められた。『人民選挙』は『諸侯選挙』によって代替された。…

このように国王選挙人の範囲は絶えず狭小化し、その発展の帰結が帝国身分の形成なのであった。13世紀の最初の三分に一期にすでに三人のライン沿岸大司教、ライン宮中伯、ブランデンブルク辺境伯、ボヘミア王は国王選挙の予備選挙権を獲得し、13世紀中頃にそれを独占的に高めることができた。」<sup>19)</sup>

そして「帝国議会は最終的には、三つの部会から構成された。この中で最も古い部会は、選帝侯部会(Kurfürstenrat)である。これは、1273年には現れており、1356年の金印勅書—ここで選帝侯が皇帝を選出し、また選挙協約の交渉を行なう排他的な権利をもつことが定められた—の中でも確認された。選帝侯部会の最初の構成員は七名である。」<sup>20)</sup>

一方、「末期中世において王の聖別が意味のないものと見なされるに至った…理由としては、主として二つの原因を挙げることができる。一つは聖職者政治に関する

ものであり、もう一つは法学上のものである。…この長い発展過程の終結は、インノケンティウス三世の『聖なる塗油について』という教令によって要約されている。…教皇インノケンティウス三世は、司教になる者の頭に聖油を塗ることを認めたが、これと同じ塗油される特権を君主に対して断固として拒否したのである。』<sup>21)</sup>

また「グレゴリウス7世は国王をもはや『主に塗油せられた者』ではなく、ただなお一人の俗人にすぎないとみなした。教皇インノケンティウス三世のもとで七つの秘蹟の教義が教会法によって定められたとき、支配者の聖別は最終的にその秘蹟的地位を失った。ドイツ王国では国王戴冠の際、塗油はその後も確かにおこなわれたが、フランスやイングランドと違ってもはや秘蹟とはみなされなくなった。…

戴冠の儀式では、狭義の戴冠、新国王に王冠を頭戴する行為がますます前面に現れ、国王推戴の頂点となった。王冠の受領は衆人に効果的な儀式であり、王位取得への決定的で設権的な法的行為とみなされた。』<sup>22)</sup>

そして「フランスとイングランドという西欧の二つの大きな君主国が、後世の法学者ならばほとんど当然と見なしたと思われる試みを実行しようと企てたとき、法学上の諸理論が少なくとも補足的な仕方では役に立ったと我々は想定してよいであろう。すなわち、王の治世および完全なる権限行使の開始を、教会典礼上の聖別から分断しようとする試みである。聖王ルイが1270年にアフリカで死去したとき、アンジュー家のカルロに導かれて当時自らチュニスの海岸にいたフィリップ三世は、ただちに完全なる王権を掌握した。いずれにしても聖別は、彼がフランスに帰還するまで延期されねばならなかったが、フィリップ三世は自らの聖別を待つことなくフランス国王となり、王としての権利や特権をすぐさま獲得した。そして、これに応じてフィリップは、あらゆる習慣に違背にして、自らの治世を彼の聖別の年ではなく、王位継承の年から始めたのである。1272年のイングランドにおいても、同様のやり方が採られた。ヘンリー三世が死去したとき、当時聖地においてイングランドにはいなかった彼の息子エドワード一世は、父の葬儀の日であった王位継承の日から、王としての完全なる権威と権力をもって統治を開始したのである。エドワードは完全なる権力を手にするために、戴冠まで待つ必要はなかった。…

このようにフランスとイングランドの二つの王国は、ちょうどレンゼの決議と皇帝の勅令『リケト・ユリス』が帝国の空位期間を存在しないものとして最終的に処理したのと同様に、王の継承と戴冠の間に生ずる『小さな空位期間』を排除するのに成功した。』<sup>23)</sup>

このような状態の下で選挙が行われることになる。

1273年10月1日フランクフルトでハプスブルク家のルードルフ(Rudolf von Habsburg 在位1273~91)が七名の選帝侯全員一致によりローマ王に選ばれる。10月24日アーヘンで戴冠。

こうして1254年の公式文書に『神聖ローマ帝国』の名称が現れ、また選帝侯の七名による国王選挙が固定化していく。『神聖ローマ帝国』の成立を『大空位時代』、あるいはハプスブルク家のルードルフI世からとして良いのかもしれない。

#### ●フランクフルト・アム・マイン(Frankfurt am Main)

ここには852年、ルートヴィヒ2世ドイツ人王が王宮付礼拝堂を作っていたが、12世末、聖バルトロメウス聖堂と改名された。876年8月28日フランクフルトで、ルートヴィヒ2世ドイツ人王が亡くなる。

コンラートIII世が、1147年フランクフルトで息子ハインリヒ共治王(Mitkönig)として選出させた。1152年バルバロッサが選出され、1196年2歳になるフリードリヒが共治王として選出された。1208年オットーIV世が約50諸侯の満場一致により王に選ばれ、1212年フリードリヒII世が再び王に選出された。また1220年フリードリヒII世は、諸侯により息子ハインリヒ(Heinrich (V II.))を王に選出させた。その後、1257年1月13日フランクフルトの市門の前で、イングランドのコーンウォール伯リチャードが選出され、4月1日フランクフルトでカスティージャのアルフォンソ10世(Alfonso X. 王在位1252~84; 1221年11月26日 Toledo~84年4月4日 Sevilla)が選出された。そして、1273年10月1日フランクフルトで、ハプスブルク家のルードルフが選出された。こうして慣行となったバルトロメウス大聖堂における国王選挙は、1356年のカールIV世による金印勅書により公式に定められた。このような経緯で、フランクフルトが国王選挙の都市となった。

なおコンラートIII世以降、ハインリヒVI世、シュヴァーベン公フィリップ、コンラートIV、ハインリヒ・ラスペ、ホラント伯ヴィレム[ヴィルヘルム]2世(在位1234~56)の5名がフランクフルト以外で選挙された。

皇帝カールIV世の金印勅書による「選挙、進行、宮廷会議などの儀式に関する規定(第24条以下)は、神聖ローマ帝国の終焉まで遵守された。またフランクフルトで国王の選挙、アーヘンでの戴冠式を挙行し、ニュルンベルクで新国王の帝国会議を開くのが古くからの慣行であると記され、その遵守がも定められた(第29条)。』<sup>24)</sup>

#### おわりに

「帝国移譲論は、何世紀もわたって様々な要素が組み合わされ、中世盛期になってようやく完成された。この理論によると、ローマ帝国に対する支配権は、カール大帝の皇帝戴冠によってまずフランク人へ、次にオットー大帝の戴冠によってドイツ人へ委譲された。』<sup>25)</sup>

つまり『『ドイツ王=皇帝』という図式が成り立つのは、962年の時にドイツ王オットー(一世、大帝)が皇帝に戴冠されて以降のこと。』<sup>26)</sup>

「ドイツ人」を強調すると、オットー大帝は一つのメルクマルとなる。そのためか、「今日ドイツ王・皇帝で『ハインリヒ〜世』と呼ぶ場合、右に見たように『〜人目』とする基準は国王位であり、皇帝位ではなかった。ところが同じくドイツ王・皇帝で『カール〜世』と呼ぶ場合、『〜人目』とする基準は国王位でなく皇帝位である。」<sup>27)</sup>

確かに 911 年カロリング家が東フランク王国で断絶して以来、『コンラート〜世』、『ハインリヒ〜世』では「国王位」を基準にしている。例えば、オットー大帝の父ハインリヒは、皇帝とはならなかったが、歴史家は彼を一世とし、彼以後を二世としている。そのため皇帝としてのハインリヒ I 世は存在しない。

しかし、「例えば今日われわれが『ハインリヒ三世』と固定的に呼んでいるドイツ王・皇帝は、実際には当初は『国王ハインリヒ三世』(Heinricus tercius rex, 1046 年 11 月 25 日付け国王文書など)と自称しているが、皇帝戴冠(1046 年 12 月 25 日)以後は『皇帝ハインリヒ二世』(Heinricus secundus Romanorum imperator augustus, 1047 年 1 月 1 日付け国王文書など)と自称している。」<sup>28)</sup>

同様にコンラート 1 世(在位 911~18)は、皇帝とならなかったが、歴史家は彼を一世とし、彼以後の皇帝を、皇帝としてコンラート I 世であるにもかかわらず、皇帝コンラート II 世(在位 1024~1039)としている。つまり皇帝コンラート I 世は存在しないのである。

同様にプロイセンのフリードリヒ大王は、プロイセン王としてフリードリヒ 2 世(王在位 1740~86)であり、ドイツ皇帝として同名の前任者がいなかったにもかかわらずフリードリヒ III 世(皇帝在位 1888)となっている。

なぜ、この様なことになっているのであろうか。それはおそらく、ドイツの歴史家の見方のためではないかと思われる。それもナショナリズムがあるころの見方である。

「つまり、古代ローマ帝国の真の後継国家である『神聖ローマ帝国』はオットー大帝(一世)により開かれ、ドイツ民族の支配のもと、千年にわたりその輝かしき歴史を刻み込んできた…

まさしく 19 世紀後半のドイツ法学、経済学、歴史学界は『神聖ローマ帝国ルネッサンス』といった状況であったのだ。そしてこの状況は新生なったドイツ帝国(第二帝国)の国威高揚に資することになり、為政者たちにとっても歓迎すべきものであった。」<sup>29)</sup>

また皇帝ロータル I 世(在位 817~55)と皇帝ロータル III 世(在位 1133~37)の間に、皇帝ロータル II 世は存在しない。「ロータル II 世」はロータル I 世の息子のロータル 2 世ではないかと思われる。もしそうなら、ロタリングエンもドイツに組み込まれることになる。<sup>30)</sup>

なお、『Die 101 wichtigsten Personen der deutschen Geschichte』では、オットー I 世は、「オットー大帝」とはなっていない。この本で「大帝 der Große」とあるの

は、カール大帝 Karl der Große、プロイセンのフリードリヒ大王 Friedrich der Große、ロシアの女帝エカチェリーナ Katharina die Große の三人だけである。

これは、ヨーロッパ統合の流れのなかで、ことさらナショナリズム的に「ドイツ人」を強調する必要がなくなったのかもしれない。もしそうなら、神聖ローマ帝国は「カール大帝」から始まる、とされ、オットー「大帝」から、としなくなったのかもしれない。「歴史」とは、国の物語、民族の物語なのだから。

「ゲルマン民族の大移動」を例にすると、このゲルマン民族の大移動は、18 世紀の終わり頃、ラテン語で migratio gentium と記述された。これをフランス語にすれば、migration de peuples となるが、フランスの歴史家は les migrations barbares (蛮族の移動)とか les grandes invasions (大侵入)とした。ドイツ語では Völkerwanderung (諸民族移動)という。なお英語では「蛮族の移動 Barbarian Migrations」(375~568)である。

確かに、「ゲルマン民族の大移動」の方が中立的な表現ではあるが、ローマ帝国の内から見ているフランスと外から見ているドイツでは見方により言い方が異なるのも事実である。

日本の西洋史は、ドイツ史学の中で形成された伝統を受け継いでいるのではないかと思われる。そして、それを日本の大学の西洋史の先生方が受け継ぎ、日本の歴史の教科書に掲載されているのである。

### その後、「神聖ローマ帝国」はどうなるのか?

1804 年 5 月 18 日、ナポレオンがフランス皇帝(在位 1804~14, 15)を宣言。12 月 2 日、パリのノートル=ダム(Notre-Dame)で戴冠。第一帝政(1804 年~14 年)が始まる。8 月 11 日、マリーア・テレズィアの孫で神聖ローマ帝国皇帝フランツ II 世がフランツ I 世(Kaiser Franz I. von Osterreich 在位 1804~35)として「オーストリア皇帝」となることを受け入れる。神聖ローマ帝国の双頭の鷲の紋章は、オーストリア帝国の紋章に移行した。

1806 年 7 月 12 日、バイエルンなど 16 の諸国で「ライン連盟(第二次ライン同盟)(Rheinbund)」が結成され、「選帝侯」の称号が廃止される。8 月 1 日、ライン連盟の諸国が帝国から離脱し、8 月 6 日、フランツ II 世が神聖ローマ帝国皇帝として退位することを宣言し、ここに神聖ローマ帝国(das Heilige Römische Reich deutscher Nation)が解体されることになった。

神聖ローマ帝国皇帝フランツ II 世(Franz II. 在位 1804~06)は、オーストリア皇帝フランツ I 世(Franz I. 在位 1806~35)となった。

### 注

- 1)『西欧中世史事典 III』79-80 頁。
- 2)『西欧中世史事典 III』82 頁。

- 3)『西欧中世史事典 III』83 頁。  
 4)『西欧中世史事典 II』116 頁。  
 5)『西欧中世史事典 III』81 頁。  
 6)『西欧中世史事典 III』81 頁。  
 7)『世界歴史大系ドイツ史 1』141 頁。  
 8)『世界歴史大系ドイツ史 1』153 頁。  
 9)『騎士の時代』394 頁。  
 10)『世界各国史 13 ドイツ史』の付録 071 頁にあるフェルディナント 1 世の「1558 から皇帝」は間違いであろう。  
 11) 菊池『神聖ローマ帝国』131-132 頁。  
 ウィレム(独語 Wilhelm von Holland)は、1228 年に生まれ、1256 年 1 月 28 日に亡くなる。「ウィレムは 1256 年冬、フリースラントへの遠征中、誰も知らぬうちに馬もろとも凍った沼に溺れて命を落とした。その遺体が発見されたのは死後 26 年経ってからであった。」(菊池『神聖ローマ帝国』132 頁)  
 12)『騎士の時代』397-398 頁。  
 13)『騎士の時代』405 頁。  
 皇帝フリードリヒ II 世は、「1250 年 12 月 13 日の朝、彼は末っ子の最愛の息子マンフレッドの腕に抱かれて死んだ。遺体はシチリアに運ばれ、パレルモの聖堂の、ライオンによって運ばれた斑岩の墓石の中に埋葬された。」(『騎士の時代』399 頁)  
 14)『ドイツ中世後期の歴史像』4 頁。  
 15)『ドイツ中世後期の歴史像』6 頁。  
 16) 木村靖二編『ドイツ史』71 頁。  
 17)『ローマ教皇庁の歴史』229 頁。  
 18)『近代法の歩み』31-32 頁。  
 19)『西欧中世史事典 III』71 頁。  
 20) ウィルソン『神聖ローマ帝国 1495-1806』132 頁。  
 21)『王の二つの身体(下)』62 頁。  
 22)『西欧中世史事典 III』79-80 頁。  
 23)『王の二つの身体(下)』72-73 頁。  
 24)『ドイツ中世都市の自由と平和』78 頁。  
 「フランクフルトは、すでに 13 世紀に国王選挙地として支配的地位を占めた。選挙結果は公示され、選ばれた者は儀式によって国王に『推戴』されねばならなかった。それは、14 世紀初め以降、祭壇登極(elevation, exaltation)の方式で挙行された。選ばれた者はバルトロメウス教会の中央祭壇上に推戴され、続いて聖職者と人民に国王として紹介された。この儀式は、1308 年のハインリヒ七世の選挙について初めて(トリニア大司教)バルドゥイン年代記(Codex Balduino)の彩飾画によって証明されているが、選挙行事における自由様な法的行為とみなされた。」(『西欧中世史事典 III』91 頁)  
 25)『西欧中世史事典 II』99 頁。  
 26)『あだ名で読む中世史』200 頁。  
 27)『あだ名で読む中世史』201 頁。  
 28)『あだ名で読む中世史』200 頁。  
 29)『神聖ローマ帝国』20-21 頁。  
 30)『新訂 世界歴代王朝王名総覧』ではザクセン公ロタール二世(皇帝戴冠 1133)とある。171 頁参照。

#### 参考文献

「神聖ローマ帝国の始まりについて(その一、その二)」参照。